

## &lt;原 著&gt;

## 通常の学校に在籍する聴覚障害児の学級適応

安田 遙\*・濱田 豊彦\*\*・大鹿 綾\*\*\*

東京都内の小学校に在籍し、難聴通級指導教室に通級している聴覚障害児の学級適応状況について、通級教員を対象に質問紙調査を行い、適応状況に影響を及ぼす要因について聴力と学力の観点から検討を行った。

調査の結果、良耳平均聴力レベル70dB以下の児童が75%を占め、難聴の程度が軽中等度の児童が多かったが、重度の児童も25%存在した。学級適応の指標とした「友人とのトラブル頻度」が高い児童について、明確な要因は見いだされなかったが、「授業中に発言や質問」が少ない児童については、学習内容の理解の困難が影響している可能性が示唆された。「今後の進路」の判断においては、音声コミュニケーションの活用程度と学習内容の理解度が学校生活への適応に大きく影響している様子がみられ、音声でのやり取りに負担が大きい場合や学習の遅れが著しい場合には、ろう学校の少数集団で本人の理解に合わせやすい学習環境が検討されていた。また、語彙力の発達が遅れている児童については、学習に限らず様々な場面の困難に語彙の少なさが影響している可能性が示唆された。

キーワード：聴覚障害児、難聴通級指導教室、学級適応、通常の学校、質問紙調査

## I. はじめに

聴覚障害教育においては、1960年代からのパーソナル補聴器の普及、早期教育の実施によって他の障害に先んじて統合教育が進んできた(鷺尾, 2002)。それに伴い、聴覚障害児が通常の学校で学ぶ際に生じる困難に対する支援について、在籍学級での配慮事項や教科学習の支援方法、障害理解授業の内容など、様々な観点から研究がなされてきた(広本・立入, 2001; 田原, 2001; 黒田・鷺尾・松本, 2002)。しかし、現在在籍している児童が学校環境に適応しているかという観点からの研究は少なく、また個別事例や過去の体験を振り返る方法による検討が多いため、現在の学校生活の全体像がつかみにくい。

通常の学校に在籍する聴覚障害児の学級適応に関するこれまでの研究としては、山埜(1987)がソシオメトリーを用いて在籍学級内での聴覚障害児の友人関係について分析を行っている。その結果、在籍学級内における社会的地位について、聴覚障害児に限っての特定の傾向はみられず多様であると報告した。武田

(1991)は、聴覚障害に対する専門的な早期教育を受けていることを前提に、概ね学校生活に適応していると述べている。美濃・鳥越(2007)は聴覚障害児が通常の学校で学ぶ際には、友人関係、学習、障害認識の3領域の課題が存在し、それらへの対策としてクラスの中での共通のコミュニケーション方法の確保、情報の保障、教科内容の工夫、聴覚障害児(者)との交流などが考えられると報告した。

2011年の障害者基本法の一部を改正する法律の施行に伴い、インクルーシブな教育環境をどのように実現していくのかが問われている。また、2002年からの新生児聴覚スクリーニングモデル事業の導入や人工内耳の普及、社会環境の変化等により、軽中等度難聴児も含め早期発見・療育を受けて難聴通級指導教室へ通級するなど、対象児の実態は急速に変化してきている。

そこで本研究では、難聴通級指導教室を利用している聴覚障害児の学級適応状況を調査し、その適応程度に影響を及ぼす要因や生じている困難の実態について明らかにすることを目的とする。

## II. 方法

## 1. 対象

難聴通級指導教室(以下、「通級」<sup>1)</sup>とする。)を設

\* 東京学芸大学大学院教育学研究科

\*\* 東京学芸大学総合教育科学系特別支援科学講座

\*\*\* 広島大学大学院教育学研究科附属特別支援教育実践センター

置している東京都内全ての小学校42校277名に調査を依頼し、協力の得られた学校の教員に対して、担当児童の学級適応状況に関する質問紙調査を実施した。

## 2. 手続き

各学校へ質問紙を郵送し、通級担当教員から保護者に質問紙を配布し実施した。調査期間は、2011年1月～2月であった。

## 3. 質問紙構成

質問紙は、平均聴力レベル、補聴器等装用時閾値、コミュニケーション手段などの「児童プロフィール」、教研式読書力診断検査や絵画語彙発達検査の結果、国語・算数の成績の教員による印象評定などの「学力面について」、学校生活の様子印象評定、小学校卒業後の進路に関する意見、現在課題を感じている内容とそれを解決する手立てなどの「学校生活全体について」の3カテゴリからなる13項目であった。いずれも選択回答、該当する数字の記入のほか、程度に関する質問は4件法と自由記述により回答を求めた。

## Ⅲ. 結果

協力を依頼した42校中25校より協力が得られ、133名の児童の担当教員から回答があった。

### 1. 対象児のプロフィール

#### (1) 聴力について

各児童の良耳平均聴力レベルを10dBごとに分類し集計を行ったところ、30dB以下児が19%でピークであった (Fig. 1)。また、補聴器装用をしている者の良

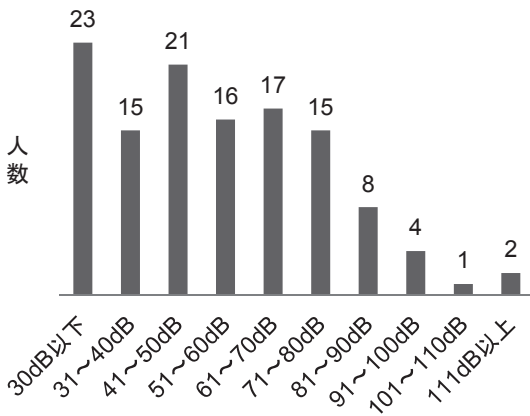


Fig. 1 良耳平均聴力レベル (n=122)

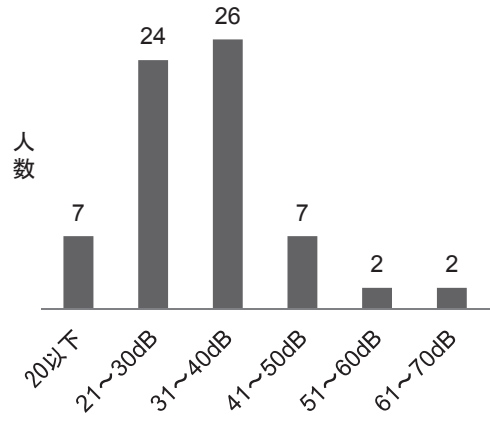


Fig. 2 装用良耳閾値 (n=68)

耳の装用時閾値では31～40dBにピークがあった (Fig. 2)。

#### (2) 補聴器等装用状況

補聴器等の装用状況については、「両耳補聴器装用」が最も多く (60%)、「装用していない」(18%) がつづいた。人工内耳を装用している児童は、補聴器併用児と人工内耳のみ装用児合わせて10%であった (Fig. 3)。

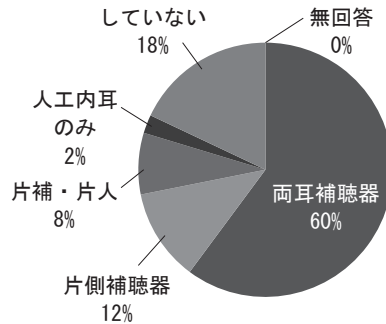


Fig. 3 補聴器・人工内耳の装用 (n=129)

#### (3) 学校生活でのコミュニケーション

児童が学校生活において使用している主なコミュニケーションについて、「話す・聞く」、「手話」、「指文字」、「身振り」、「筆談」、「その他」の6つの選択肢から複数回答可で回答を求めたところ、100%が「話す・聞く」であった。

#### (4) 音声によるコミュニケーション活用の程度

音声によるコミュニケーションの状況について、「静かなところなら会話に困らない」、「静かなところでも時々聞きとれない」、「静かなところでも聞きとれないことが多い」、「静かなところでもほとんど聞きとれない」

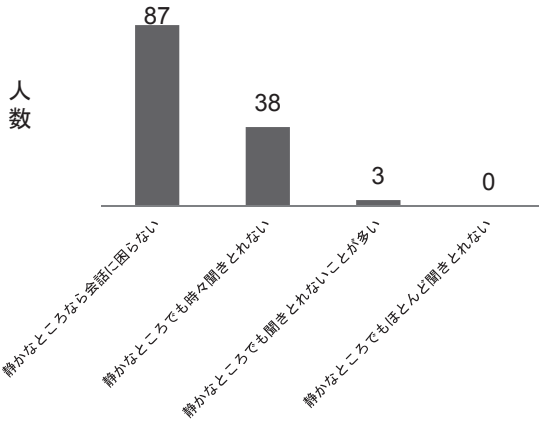


Fig. 4 音声でのコミュニケーション (n=128)

い」の選択肢から回答を求めた。「静かなところなら会話に困らない」が87人 (68%) と最も多く、次いで「静かなところでも時々聞きとれない」38人 (30%) と、全体的に選択肢内での評価は高い結果となった (Fig. 4)。

## 2. 学力について

### (1) 国語の成績について

国語の成績の印象について、「学年相応より高い」、「概ね学年相応」、「学年相応にそこまで困難ではない」、「学年相応に困難」の質問項目から回答を求めた。「概ね学年相応」以上の印象をもたれている児童が82名 (61%) で、24名 (18%) の児童が「学年相応に困難」と回答された (Fig. 5)。

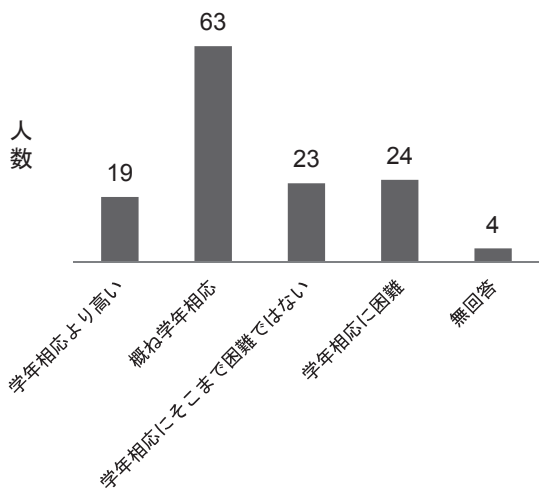


Fig. 5 国語の成績 (n=133)

### (2) 算数の成績について

算数の成績の印象についても、国語の印象と同様の質問項目から回答を求めた。結果についても国語の成績とほぼ同様で、「概ね学年相応」以上の印象をもたれている児童が82名 (61%)、「学年相応に困難」の児童が27名 (20%) であった (Fig. 6)。

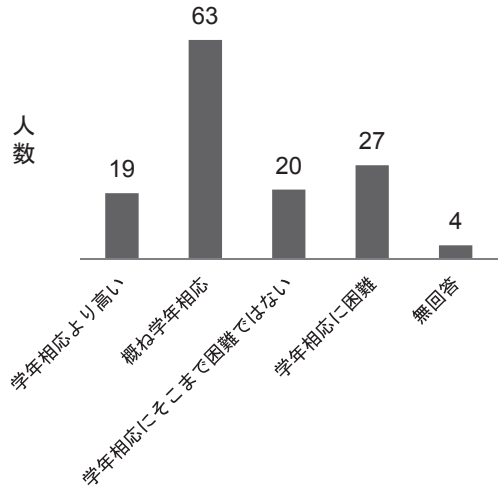


Fig. 6 算数の成績 (n=133)

### (3) 読書力検査結果

教研式読書力診断検査を行っていた児童について、読書力偏差値および読書学年と実施年月を尋ねた。68名の児童について回答があり、読書力偏差値は読書学年に換算した。読書学年と実施年月の差が1学年以内を「学年相応」とし、読書学年が実施年月時の学年と比して「1学年より高い児童」、「1学年より低い児童」の3群に分類した (Fig. 7)。51名 (75%) の児童は学年相応の読書力を示し、実施時学年と比して1学年より高い児童は8名 (11%)、1学年より低い読書学年

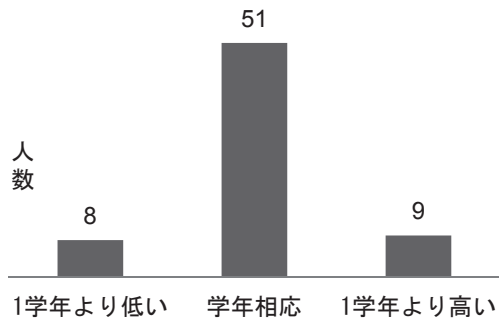


Fig. 7 読書力検査結果 (n=68)

の児童は9名（13%）であった。

#### (4) 語彙力検査結果

絵画語彙発達検査を行っている児童について、語彙年齢、生活年齢、実施年月を尋ね、76名の児童について回答があった。語彙年齢と生活年齢との差が1歳以内の児童を「年齢相応」とし、語彙年齢が生活年齢と比して「1歳より高い児童」、「1歳より低い児童」の3群に分類した（Fig. 8）。40名（52%）の児童の語彙年齢が生活年齢と比較して1歳より低く、語彙力が遅れている児童が多く存在した。

### 3. 学校生活について

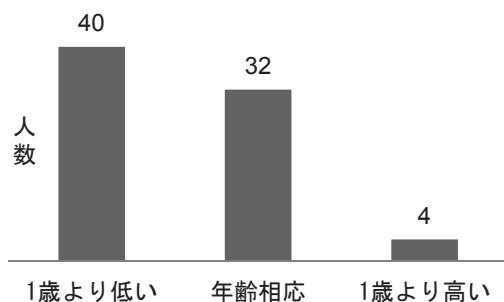


Fig. 8 語彙力検査結果 (n=76)

#### (1) 学校生活全体の様子

児童の学校生活全体の様子について、人間関係に関する「友だちとのトラブルは少ない」、授業活動に関する「授業中に質問することができる」、児童の現状をふまえ卒業後の進路についての意見を尋ねる「中学校はろう学校が適当と感ずることがある」の質問項目を設定し、それぞれについて「あてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の4件法で回答を求めた（Fig. 9）。「中学校はろう学校が適当と感ずることがある」については、69%が現在と同環境での進学、24%がろう学校への進学が適当と感ずられていた。

い」の4件法で回答を求めた（Fig. 9）。「中学校はろう学校が適当と感ずることがある」については、69%が現在と同環境での進学、24%がろう学校への進学が適当と感ずられていた。

#### (2) 本児の学校生活における改善点

担当児童の学校生活における課題と感ずる点について、「コミュニケーション面」、「学習面」、「友達との付き合い」、「自分から情報を得ようとする姿勢」、「特になし」、「その他」の選択肢より、複数回答可として回答を求めた（Fig. 10）。その結果、「学習面」が26%、「自分から情報を得ようとする姿勢」が25%と多く、「友達との付き合い」が21%、「コミュニケーション」が17%とつづいた。また、自由記述により課題の具体的な内容をたずねた。以下代表的な回答を記す。

コミュニケーション面の課題では「音声だけでは十分伝わらない」、「言いたいこと、聞きたいことがあった時、即座にまとめて言うだけの言語力がない」、「会

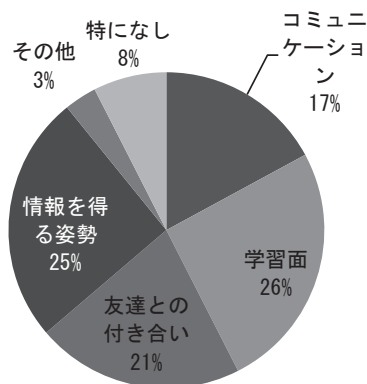


Fig. 10 学校生活における改善点 (n=127)

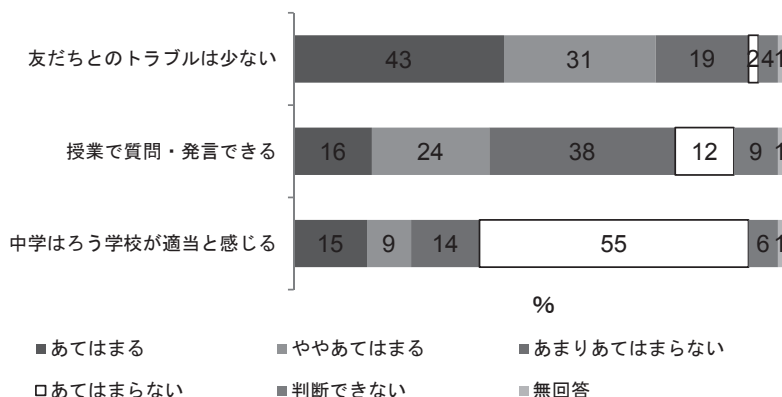


Fig. 9 学校生活について (n=133)

話のスキルが不十分で、言いたいことを一方的に言うだけのことがある」等が回答された。

学習面では「語彙の不足が目立ち、学習に困難がみられる」、「わからないとやらない、面倒だとやらない等、学習に対して消極的」、「学習全般」、「グループでの話し合い活動に参加できていない」等が回答された。

友達との付き合いでは、「相手の気持ちの理解が不十分なため、しつこくかかわったり、逆に何も言えなかったりする」、「友人の幅がせまい」、「友達への関心が薄く、一人の世界の中で楽しんでいる様子がみられる」、「すぐかっとなり手を出してしまう、乱暴な言い方をしてしまう」等が回答され、他人との関わりに消極的であることから友人とのトラブルにつながるものまで、課題の内容は多様であった。

情報を得ようとする姿勢では、「わからなかった場合、内容を知ろうというよりはわからない事を隠す傾向がある」、「自分が難聴であるために聞き取りにくいことがあることや、発音が不十分なことがあることの自覚が弱い」、「周囲への関心の乏しさ」、「本児は友だちに恵まれていて、困ったことがない。本児が自ら聞く前に、友達の方が教えてくれるので自分から情報を得ようとする姿勢が弱い」等が回答され、自身の聴覚障害により聞き取れていない情報があることの自覚の薄さや、それについての対策の未熟さがあげられていた。また、聴覚以外の障害による困難が回答されていた児童も4名いた。

#### IV. 考 察

本研究では、調査で得られた結果から、学級適応程度に影響をおよぼす要因と、語彙力が学校生活におよぼす影響について考察した。

##### 1. 学級適応程度に影響をおよぼす要因について

学校生活場面の「友人関係」「授業活動」に関する評定、「今後の進路」の評定を「学級適応の程度」の指標とし、それぞれに聴覚障害児のどのような要因が関わっているかについて検討した。

具体的には、学校生活の様子に関する「友達とトラブルを起こすことは少ない」、「授業中に発言や質問ができる」、「中学校からはろう学校が適当と感じる」の3つの質問項目について、「あてはまる」と「ややあてはまる」と回答した者を肯定的回答群、「あまりあてはまらない」と「あてはまらない」と回答した者を否定的回答群とした。これら肯定的回答と否定的回答を従属変数、良耳平均聴力レベル、音声によるコミュニケーションの活用程度、国語成績の評定、算数成績の評定、読書力診断検査結果、絵画語彙発達検査結果を独立変数として、通級教員の評価による児童の学級適応の実態について、聴力と学力の視点から検討した。良耳平均聴力レベルについてはt検定を行い、それ以外の変数についてはU検定を行った (Table 1)。

「友達とのトラブル」に関する項目では、どの要因とも有意差は認められなかった。しかし「学校生活における本児の改善点」において、友達との付き合いが

Table 1 各項目についての検定結果

		聴力 レベル	音声 Com	国語 成績	算数 成績	読書力 検査	語彙力 検査
		平均値 (t 検定)	順位 (U 検定)	順位 (U 検定)	順位 (U 検定)	順位 (U 検定)	順位 (U 検定)
友達との トラブル	少ない (n=97)	54.4	61.4	62.2	61.9	33.6	39.1
	多い (n=26)	53.7	61.8	61.4	62.3	33.0	31.8
	危険率	0.889	0.950	0.918	0.955	0.906	0.225
授業中の 発言や 質問	できる (n=52)	53.6	53.0	50.6	50.4	27.9	29.8
	できない (n=64)	55.2	62.0	64.9	65.1	33.3	38.4
	危険率	0.720	0.080	0.014 *	0.011 *	0.107	0.041 *
進路 の判断	ろう学校進学が良い (n=31)	64.3	76.4	82.7	82.3	39.0	43.6
	現在の環境で良い (n=89)	48.8	54.2	52.8	52.9	30.5	32.2
	危険率	0.001 **	0.000 **	0.000 **	0.000 **	0.041 *	0.016 *

\*\*=p<0.01, \*=p<0.05



課題にあげられている児童は、自分が聞きとれなかったことへの自覚の薄さや身の回りで起こっていることや情報への関心の薄さ、音声のみのコミュニケーションの限界などから、他人との関わりに対する消極的態度や相手の意図をくみとることの困難、感情的な行動に至るまで、多様な課題内容が回答された。特に「友達とのトラブル」の項目で否定的回答のあった児童については、それらの課題によって「友達の気持ちや場にそぐわないことばを言うてしまう」等、状況に合わない行動や強い言葉を相手にぶつけてしまう場合に、トラブルが起こっている様子が回答されていた。学齢期には子ども自身への支援と同時に集団の中で過ごすことへの支援の必要性（小林，2008）が示されているように、トラブルが起こっている場合にはより丁寧に場面の理解や対策について指導を行う必要があると考えられた。

「授業中に発言や質問ができるか」についての項目では、国語・算数の成績や語彙力検査結果に有意差が認められた。また、否定的回答群の教員が感じる課題の自由記述では、「学習に取り組む姿勢はよいが、理解が伴わない」、「学習全般に遅れがみられる」、「語彙力の不足が目立ち、学習に困難がみられる」など回答されており、学習内容の理解に困難があることにより、授業の進度に遅れをとっている様子がみられた。

「今後の進路の判断」においては、聴力レベル、音声コミュニケーションの活用程度、学力に関する項目すべてに有意差がみとめられ、音声コミュニケーションの活用程度と学習内容の理解度が、学校生活への適応に大きな影響を及ぼしていることが示唆された。すなわち、音声コミュニケーション活用程度および学習内容の理解度が高い児童においては、教員から現在の環境のままでよいと感じられており、同項目が低い児童については、ろう学校への進学を検討されていた。通常の学校においては、日常のやり取りから学習に至るまで主なコミュニケーション方法は音声であり、「話す・聞く」という方法を用いてどのくらいの情報を得られるかということは、生活全体を支える重要な指標となると考えられた。また学習の遅れが著しい場合には、教員が課題とを感じる内容の自由記述に「ろう学校のより少人数での集団で過ごさせ、手厚い学習支援を受けさせたい」等と回答されているように、本人の理解に合わせやすい体制で学習を進める環境が検討されているようであった。

## 2. 語彙力が学校生活に及ぼす影響について

言語力に関する検査結果において、読書力診断検査ではほとんどの児童が概ね学年相応であるのに対し、絵画語彙発達検査結果では全体的に遅れが目立った。このことから、会話の大まかな構造は理解できるが、端々を正確に理解したりイメージを広げることができず、言葉の1つ1つの意味を踏まえた深い理解に繋がらないことにより、あらゆる場面において様々なイメージのずれが生じている実態が推察される。また、「学校生活における本児の改善点」の自由記述では、「語彙力が身につけておらず、会話が成立できないことがある」（コミュニケーション方法）、「自分の気持ちを言葉にできず手を出してしまう」（友達との付き合い）、「語彙が少なく、授業についていけない」（学習面）等、課題の項目をこえて「語彙力の不足」が多数回答された。これらのことから、語彙力の不足が対人関係や自己表現、学習等、様々な困難場面に影響している可能性が示唆された。

## V. まとめ

東京都内の難聴通級指導教室に通級している聴覚障害児の学級適応状況について、通級教員へ質問紙調査を行い、「友人とのトラブル」の頻度、「授業中に発言や質問ができるか」、「今後の進路」の評定結果を適応状況の軸とし、それらに影響を及ぼす要因について聴力と学力の観点から検討を行った。

「友人とのトラブル」の頻度が多い者については、どの要因とも有意差は認められなかったものの「授業中に発言や質問ができるか」については、国語・算数の成績や語彙力検査結果において有意差が認められ、学習内容の理解の困難が発言や質問頻度の低さに影響している可能性が示唆された。

「今後の進路の判断」においては、すべての項目において有意差が認められた。音声コミュニケーションの活用程度は生活全体を支える指標となっており、学習の遅れが著しい場合には、ろう学校の少人数集団で本人の理解に合わせやすい学習環境が検討されていた。

全体的に語彙力不足が目立ち、学習に限らず様々な場面の困難に語彙の少なさが影響している可能性が示唆された。

## 註

1) 東京都は、通級による指導を行う場として「教室」ではなく、国の制度に比して教員配置を手厚くできるよう「学級」として設置しているが、本研究では都内ではあっても通級指導教室の名称で扱うこととした。

## 文 献

広本奈美子・立入哉（2001）聴覚障害児の障害認識の様態について：ビデオを使用した測定法と学習環境の違いによる差異について。聴能言語学研究, 18(2), 136-140.

小林倫代（2008）Ⅴ 難聴・言語障害児を地域で一貫して支援するために。課題別研究「難聴・言語障害児を地域で一貫して支援するための体制に関する実際研究」研究成果報告書（平成18～19年度），101.

黒田有貴・鷺尾純一・松本裕子（2002）通常の学級で学ぶ難聴児への教育補助員による学習支援。聴覚言語障害, 31(3), 129-137.

美濃孝枝・鳥越隆士（2007）インテグレーションをしている聴覚障害児童・生徒に対する支援のあり方に関する調査—本人の語りからの分析。ろう教育科学, 49(2), 47-66.

田原佳子（2001）健常児と共に生きる難聴児への難聴学級からの支援。聴能言語学研究, 18, 117-123.

武田修（1991）小学校における聴覚障害児の学校適応状況について—調査報告。ろう教育科学, 33(2), 45-71.

鷺尾純一（2002）インテグレーション環境で学ぶ聴覚障害児・者への教育的支援。特殊教育学研究, 39(4), 91-97.

山笠信（1987）普通学級に在籍する聴覚障害児の学級における適応について—ソシオメトリーによる友人関係を中心に。ろう教育科学, 29(1), 25-32.

（2011.12.15受理）